

アンケートによる湯川の釣魚実態調査(2003 年度)

独立行政法人水産総合研究センター

養殖研究所日光支所繁殖研究室

北村 章二

1. 目的

内水面冷水域における遊漁資源管理技術の開発に資する知見を得るため、湯川において釣魚者へのアンケート調査を行い、キャッチアンドリリース(C&R)制となって2年目の釣魚の実態を把握した。

2. 調査場所

調査対象の湯川は日光国立公園内に位置しており、湯の湖から流出し、戦場ヶ原湿原を通り、中禅寺湖へ注ぐ全長約 11.2km の一級河川である。元来、湯の湖、湯川、中禅寺湖等の奥日光水域には魚類が生息していなかったといわれているが、1902 年にアメリカから導入したカワマスが放流されて以来、湯川は我が国でも珍しくカワマスの釣れる川として人気を博している。釣魚期間は5月1日～9月30日までである。湯滝下から竜頭の滝上流部までが釣魚区間であるが、途中戦場ヶ原湿原内の一部は禁漁区間となっている。釣魚対象魚種はカワマス、ニジマス、ヒメマス、ホンマスである。このうちカワマスは天然繁殖魚の他、成魚放流によるものであるが、それ以外の魚種は湯の湖から落下してくるものである。2001 年の調査結果及び釣魚者からの要望を踏まえ、2002 年から全域が C&R 釣り場となっている。

3. 調査方法

釣魚期間開始前の資源調査結果を踏まえ、ヤツモモウラ～赤沼橋間(図1; 7、8区)において、4月28日と5月21日にカワマス成魚をそれぞれ 863 尾(100kg)及び 300 尾(63.5kg)放流した。

調査は 2003 年 5 月 1 日から 9 月 30 日までの釣魚期間中に行った。釣魚者(釣り券購入者)全員に図 1 に示したアンケート用紙を配布して記入を依頼し、3ヶ所の釣り券売場(湯の湖釣り事務所、湯滝レストハウス、赤沼茶屋)もしくは釣り場に設置した回収箱にて回収した。釣魚方法(餌釣り、ルアー釣り、フライ釣り)、釣獲魚種、釣獲尾数、釣魚場所等のデータを解析に供した。

4. 調査結果

釣魚者 4,796 名中、アンケート回答者は 1,032 名であり、回答率は 21.52%であった。回答者の釣り方別の割合はフライ釣りが圧倒的に多く 88.1% (834 名)、次いでルアー釣りが 9.5% (90 名)、餌釣りが 2.4% (23 名)の順であった。

月毎の回答者数を図 2 に示した。5月は回答者が最も多く 335 人であったが、6月には 313 人、7月は 163 人、8、9月はそれぞれ 139 人、82 人と減少した。

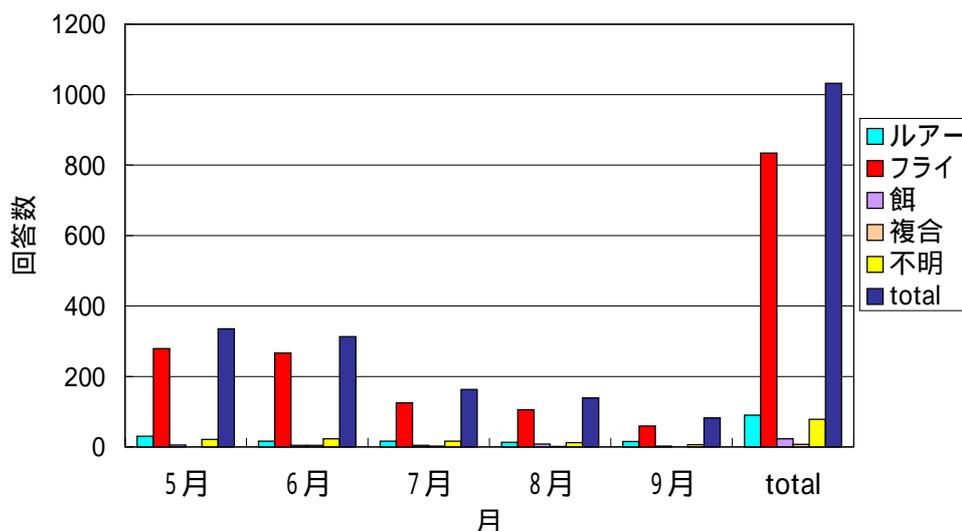


図 2 月毎の釣り方別回答数

全釣魚区間別の回答数を示したのが図 3 である。7区が最も多く、2、3、6、8区がほぼ同数でそれに続き、最下流部の 10 区が最も少なかった。

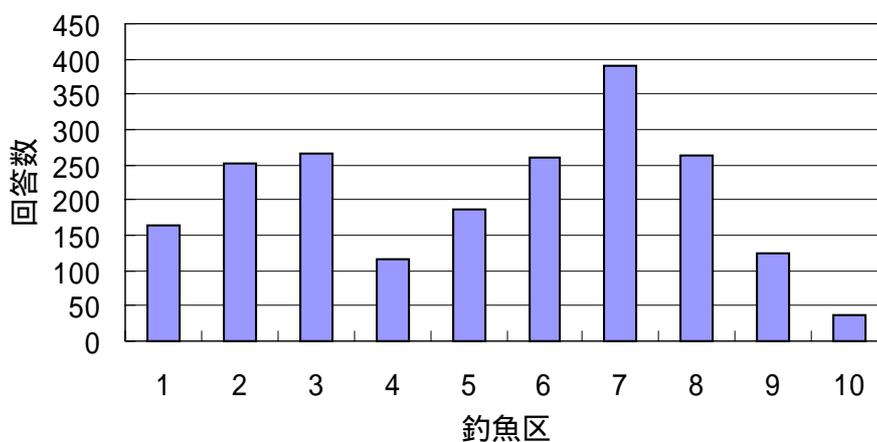


図 3 釣魚区毎の回答数

アンケートで報告された釣獲魚はほとんどがカワマスで、総釣獲尾数は 8,534 尾であったが、湯の湖から落下してきたと思われるニジマス、ヒメマス、ホンマスもそれぞれ 116, 68 及び 229 尾の釣獲報告があった。

1 回の釣魚時間の平均を釣り方別に示したのが図 4 である。全体の平均は 7.65 時間であったが、フライ釣りが最も長く 7.78 時間、次いでルアー釣りが 7.77 時間、餌釣りは 5.88 時間で最も短かった。フライ釣りと餌釣り、及びルアー釣りと餌釣りとの間には有意差がみられた。

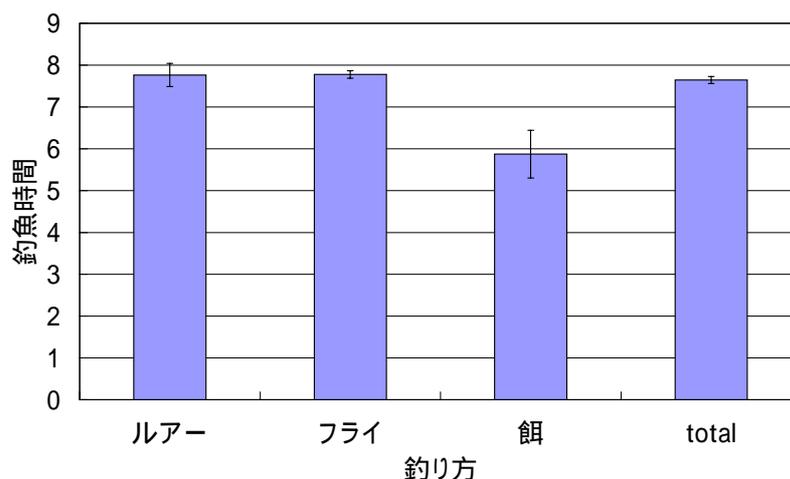


図 4 釣り方毎の平均釣魚時間

図 5 に月毎のカワマスの釣獲率 (1 人 1 時間当たりの釣獲尾数) を釣り方別に示した。期間中を通した釣獲率は、フライ釣りが 1.20、ルアー釣りが 1.20、餌釣りが 1.83 で、餌釣りが最も高かった。フライ釣りでは 6 月に 1.47 と釣獲率が最も高かったが、その後 7, 8, 9 月は 1 以下に低下した。

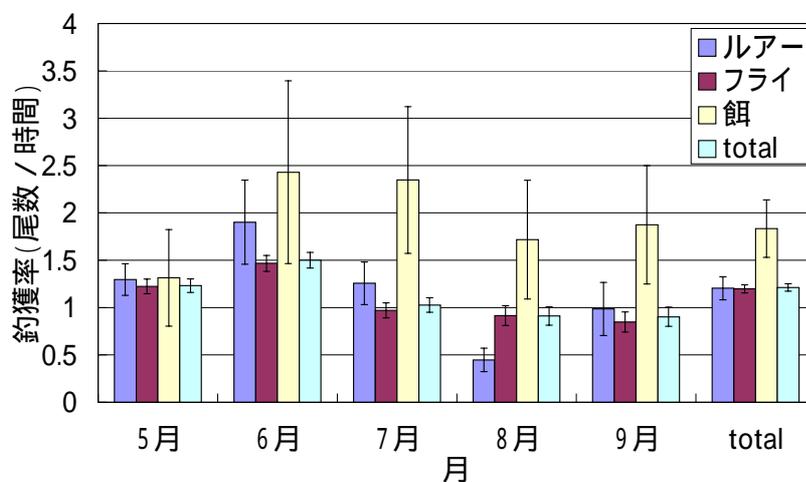


図 5 月毎の平均釣獲率

5 . 考察

今回の調査では、7月以降アンケート回答数が減少したが、回答率は21.57%とこれまでで最も高く、信頼性の高い調査結果が得られたものと思われる。今後さらにシーズンを通してコンスタントな回答を得るための方策が必要と考える。

アンケート回答者のうち、釣り方別ではフライ釣りが圧倒的に多く88.1%を占めた。フライ釣りの割合が高い原因としては、湯川を始めとする奥日光の水域が日本におけるフライ釣り発祥の地であり、湯川がそれに適した釣り場であることに加え、全国的にもフライ釣りをする遊漁者が増えてきたことがあげられる。昨年の調査では83.8%であったので、フライ釣りの割合はC&R制2年目の今年になってさらに増加している。常連のフライ釣り愛好者がさらに多く足を運ぶようになったものと思われる。

釣魚区間別にみると、上流部の2,3区と中流部の6,7,8区が多く利用されていた。これまでC&R制設定以前は、上流の渓流域は餌釣りが多く、フライ釣りは少なかった。フライ釣魚者はフライ釣り専用区間のあった戦場ヶ原湿原内の中流部を主に利用していたが、C&R制設定に伴って餌釣魚者の数が減るにつれ、上流部の2,3区も多く利用するようになってきたものと思われる。

カワマスの釣獲率は、期間中の平均が1.20尾で昨年を上回っていた。今年は成魚放流量を激減させたにもかかわらず、C&Rの定着により資源が豊富に維持され、釣獲率の上昇に繋がったものと思われる。